

探訪!

第2回

愛機のふるさと

オペレーティングの楽しさを求めて製品開発を続ける

株式会社 GHDキー



アマチュア無線の原点ともいえるモールス通信、その符号を作り出す電鍵はハムのシンボルでもある。宮城県仙台市で高級電鍵の開発を続けている(株)GHDキーを訪ねた。

JA7GHDのコールサインを持つ社長の氏家俊彦氏は、国立仙台電波高校を卒業後、大手通信機器

メーカーで陸上固定間通信の機器を手がけた後に独立、音響機器の保守サービス業を経て、GHDキー社を設立し、それから(株)GHDキーとなった現在まで電鍵の開発製造を手がけている。

平成7年に設立された同社は、社長の氏家氏が自作した無接点バグ・キーがスタートだという。



組み立て作業場にあるJA7GHDのシャックにて、同社の製品群を前にした社長の氏家俊彦氏
氏家氏が左手に持つのは新開発のGT502のアメリカン・タイプ。これは米国Milestone Technologies社向けのスペシャル・バージョンで、Milestone Technologies社のみで販売される予定とのこと

協力工場で高精度にフライス加工されたベース部分は、デジタル・スケール・フライス盤を使いGHDキー社内で機種ごとに決められた穴空け加工を施される。そのあとで、再度協力工場に送られ、鏡面研磨された後、クローム・メッキが施される
一方、レバーや支点などの真ちゅう部品のほとんどは、社内の旋盤などで材料から切り出され、規定寸法に仕上げた後、パワ加工で研磨され、協力工場でもクローム・メッキが施される



12年前GHDキー社設立前に氏家氏が自作した無接点ダブルレバーのバグ・キー

GHDキー社の部品は、ベース部分が鉄製で、他の部品は真ちゅうで作られている鉄のベース部分は正方形のものと長方形の2種があり、機種によって使い分けられる。写真は加工前の金属部品と加工が終わり組み立て前のGN607A



電信好きの氏家氏が、平成7年のハムフェア自作品コンテストに出品し、優秀作品に選ばれたこのバグ・キーは、接点にフォト・インタラプタを使い機械式接点を使わず、長点側も断続させることのできるバグ・キーだった。その後、同社でGD107WSとして製品化されたこのキーは、フォト・インタラプタの入手が困難になった現在、GHDキーのカatalogから消えてしまったが、しばらく同社の主力商品として生産が続けられた。

光センサによる無接点バグ・キーの開発動機は、バグ・キーの振動を接点が接触することにより減衰するのを防ぐと共に、接点のチャタリングをなくすことだったという。特にフルオートの長点側は抵抗を受けやすく発生する符号の数が少なくなるが、無接点の場合はこの心配がなくなる。送

符号の綺麗さを追い求めた結果とり着いた方式だった。

GHDキーの電鍵は、有接点キーの場合も、符号の綺麗さと、オペレーション時のフィーリングを追求して設計されており、無接点タイプがなくなった現在も多くの方の支持を集めている。

現在のGHDキーの製品は、縦振れのストレート・キーが4機種、バグ・キーが2機種、パドルが5機種、移動用小型モデルが2機種、それにメモリ・キーヤが2機種ある。現在有接点タイプのフルオート・バグ・キーは製品群にあるが、フォト・インタラプタの入手難により製造中止してしまった無接点キーは、GHDキー設立の原点でもあり、部品供給が許せばぜひ復活させたいと氏家社長は語っていた。

メッキされ、納入された部品は、GHDキー社内の組み立て棟で、1台ずつ丁寧に組み立てられる

